

1. 禁じられた部屋のヴァリエーション —民話の形態学のために—

周知のように、ウラジーミル・プロップはすでに古典となった著作のなかで、多様なロシア魔法民話を、恒常的な単位 (valeurs) と可変的な単位とのあいだに識別をおこなうことによってただひとつの図式に還元している¹⁾。つまり登場人物たちの機能は、この語によって「筋の展開においてそれがもつ意味作用の観点から定義される登場人物の行為」(Ⅷ、31 頁)²⁾を理解するならば、恒常的な単位であり、それを実行する者が何者であるかとか、いかなる人であるかとか、また行為がどのようにして果たされるかとかには依存しない(同上、29, 31, 81 頁)。ひとつの民話があるタイプに属するかどうかは、これらの機能の連鎖と順序によってのみ決定されるのである。

他方、「登場人物の名前と属性とは可変的な単位であり」(同上、106 頁)、それのおかげで、語り手の空想は発揮されるし、民話の法則に還元されない内容は現れる。このようにして民話は、歴史的文脈からであれ、近隣の民の叙事詩や非民衆的文学からであれ、宗教や習俗や祭儀など(同上、106-107 頁)からであれ、さまざまな影響を受けとる。それによって民話の多様性は説明される。しかしだからといってその構造が変化するわけではない。

それゆえ民話は、プロップによれば範列 (パラディグム) および連辞 (サンタグム) の二重の軸にしたがって組織される。すなわち一定数 (31 個) の機能が形成する連辞は必然性の軸を描くのに対して、範列は、ほぼ無限の置換えの可能性を提供することによって自由の軸をひらくのである。このようにして民話の骨組みはその連辞構造に還元される。そしてこの構造を語彙的要素 (登場人物の身元、属性、連結の手法) が無限に変わりうる星雲となって覆っているのである。それゆえあらゆる民話は次のように書き換えることができるだろう。 x は y に援助者 N をあたえる。 N のおかげで y は z によって課された試練に合格する……。その場合 x , N , y , z はきわめて多様な形で実現されうる。

言語学のモデルへの参照はプロップ自身が明示的に認めてもいる。彼はこう書いている。「あらゆる「述語」が民話の構造を反映している。あらゆる「主語」や「補語」そして言説の他のあらゆる部分が主題 (sujet) を定義する」(同上、

141 頁) ③。ただし、最後に現れる“sujet”なる語は、原初の図式の具体的な実現という意味で理解しなければならない。

しかし、民話とは真実そのようなものであろうか。登場人物の動機づけ、属性や身元、場所、連結の手段、これらは端的に偶然に左右される要素であり、同時に民話の深層構造にとって外的な^{もす}滓のごときものなのであろうか。筆者にはむしろ、変わりうる語彙的な要素は、別個の範疇を構成するどころか、諸機能の連串的繋がりに緊密に結びついた要因であると思われる。禁じられた部屋のテーマが受けとる変形の研究をとおして、次の二点を示し、それによって筆者は、内容を構造のうちに復帰させることを試みたいと思う。すなわち、—— 範列軸での置換えは、一見して無秩序に支配されるかと見えるけれども、行き当たりばったりに行われるわけではないこと。プロップも「垂直の欄を研究するならば、変形の規範と方法とが開示される」(同上、175 頁) ことを認めている。けれども彼はあくまで相関関係の存在を無視し、「各部分は他の部分とは独立に変化しうる」(同上、175 頁) という原則をまげないのである。そこで筆者は進化の展望を引き出そうと思う。これは、民話のあらゆる要素を同時に変化すべく強制することはないが、置換えを調整し、主題群をいくつかの支配的な形のうちに統合しつつもそれらの豊かな多様性を保証するであろう。—— 置き換えの研究によって、統辞論的要素や語彙要素間の両立と非両立が形成する水平の組織網を析出することが可能になること。そして意味論的ヴァリエーションに随伴して統辞上の変容が起こること。その結果民話の構造は不変不易ではなく、予告的なモデルの構築を可能にするような変形を受け入れるであろうこと、である。

民話と神話

西ヨーロッパを越えてもずっとずっと広い地域で確認される(たとえば『千一夜物語』の第三の托鉢僧のかたる物語⁴⁾を思い出して欲しい)とはいえ、「禁じられた部屋」の主題は、西欧の主要な神話の一つである原初的な不服従のそれと結びついているがゆえに、我々にとって格別の意味をもつ。

神話は民話に先行するのかその逆なのか、という解決不可能な問題にここでケリをつけるつもりはないし(プロップが慎重な配慮を示しつつも、民話の形

に対する神話の優先性を前提としていることは周知の通り)、仮説的な類縁関係を打ち立てるつもりもない。ただ、神話と民話との間にはすこぶる強い相関関係があることを確認するにとどめよう。その結果、後者は前者を参照せずして発展することはできず、じっさい前者は民衆的作品の無限の多様性を産出する力であると思われる。ごく単純な形をもつ神話が同じ機能連続を示す民話の遠い起源をなぞっていると確信をもって断定することはできない。とはいえ、歴史的進展との現実的な関係はなくとも、民話から神話に呼びかけることによって想像上の繋がりが確立され、それによって、基礎となる形態論的な骨組みを神話のうちに見ることができれば、それで十分なのである。ジャン・セルヴィエの提案している定義――

神話とは、その要素がある特定の社会において多かれ少なかれ波及効果を生み出すかどうかに応じて、多かれ少なかれ意味を背負った行為の図式である。(IX、21 頁)――

を受け入れるなら、次のように言うことができる。歴史的証拠は無くとも、もし神話がこのようにして民話の産出を助長するのであれば、それは一種の参照とみなすことができる、と。

神話を出発点として選び、いくつかの民話を形態論的な派生の順序にしたがってならべよう。この順序が正しいということは論の展開につれて明かになるであろう。すなわち、

0. 原罪の神話

I. 「マリアの子」(グリム)

II. 「銀の鼻」(イタロ・カルヴィーノ)

III. 「フィッチャーの鳥」(「ウルディの鳥」――グリム)

IV. 「青ひげ」(グリム、ペロー)

繰り返して言うが、筆者は年代上の継起の順序を確定しようとするものではない。「マリアの子」が比較的新しく作られたものであることは、カトリック教会の教義の発展にかかわる若干のデータによってこれを仮定することはできる。けれども、この民話が「銀の鼻」や「青ひげ」とほぼ同じ頃にあらわれた可能

性も決して排除できないのである。これらの微妙な問題は歴史家に任せよう。しかし後世における創造という仮説をとったとしても、本質的なことはそれが一つの空の樹目を、すなわち全体的な変形の図式において未開拓であった一つの潜在性を現実化すべく到来したという事実である。

他方、「神話だからという口実で、相異なる機能と効果とをもつ物語なり歌謡なりを比較することはできない」(IX、19 頁)という民族学者の警告に対しては、我々は明白なモチーフの類縁性だけでなく、おそらく機能の類似をも主張することができるだろう。というのも、それは元々は正真正銘の民話ではなく、おそらくカトリックの教義を教え広めることを目的として、民衆的ないくつかのテーマから借用した数連の要素を寄せ集めたものであったと思われるからである。仮説をどう考えるにせよ、その後に物語がまさしく民話になったという事実は、われわれがこれをそれとしてあつかう上で十分の理由である。

タイプの形態論

形態論のレベルでは、検討される四つの民話は、いくつかの単純なモチーフにまとめることのできる機能の同一の集合に還元される。すなわち、
—発端状況 (α)、少なくとも一人の(場合によっては数人の)娘を、そして必要なら二三人の男子をふくむ一家族。貧困ないし欠如の状態 (a)
—援助者の出現 (A)、これは超自然的なあるいは幻想的な存在であるか、もしくはは人間的であるがかならず奇妙な特徴で刻印されているか、のいずれかである。この人物の恒常的な属性はその富にある。彼は娘一人を養女、侍女あるいは妻として自分の城館に連れて行く。すなわち出発 ($\uparrow$) である。
—常に連結した五つの機能の連続。すなわち I E T R P = 禁止 (Interdiction)
—援助者の遠ざかり (Éloignement) — 禁止の侵犯 (Transgression) — 援助者の帰還そして侵犯の発覚 (Révélation) — 罰 (Punition)。

こうしてどの話にも共通の幹があって、これは(プロップには種類全体を示す価値をもつシステムは無いので、一機能に一記号の対応というその原則を採用して)次のように書き直すことができる。すなわち、

$$\alpha (a) A \uparrow I E T R P$$

以後には枝分かれが生じて、物語は以下のような機能の組合わせの可能性にしたがって、相異なる終わり方を見せることになる。

—要素連続 I E T R P には、いわば因数分解の形で（妹たちは長女の体験をまた新たに体験する）、もしくは子孫たちを通じて永続する罰という形で、拡大ないし一般化が起こる（もしくは起こらない）ことが可能である。

—犠牲者たちの救済（Salut）は三つの異なる形をとりうる。すなわち悔い改めに結びつく赦しの形、策略もしくは武力による救助のそれである。後二者のあいだの違いは、道具となるのが末の妹であるかそれとも外部から来た人物であるかに存する。

—場合によっては、話は復讐（Vengeance）つまり禁止者のうける罰の要素連続（V）で閉じられることもある。

これら分岐の可能性がある事実から、いくつかの疑問が生じる。一方で、これらの機能は連辞軸上で含意もしくは排除の関係によって互いに連結されるのかどうか。他方、物語が後に要素連続の中でたどる方向は完全に偶然性にゆだねられていたのか、それとも、発展を予言することを許すような標識がすでに最初期の要素連続のレベルで存在しているのかどうか、という疑問である。

周知のように、アールヌ・トムプソンの分類によれば、これらの物語は二つのタイプに分けられていて、それぞれの最も代表的な形態は「フィッチャーの鳥」（no 311）と「青ひげ」（no 312）とが示すという。ドラリュは「青ひげ」の項目にアールヌ・トムプソンのいわゆる二つのタイプをまとめて置くが、先行分類の no 312 を 312A で指示することによって、この形とキリスト教化されたもう一つの形—フランス中央部に特有の形であるが、その形からは禁じられた部屋のモチーフは消失している—とを区別し、後者に 312B の番号を打っている。

ある変異体から他の変異体にかけて明らかに連続があるのだから、ドラリュによる統合の努力は原理的に正しいと思われる。けれどもそれは単に一定数の下位タイプにおよぶ形式的操作なのである。ドラリュは、民話の主要な語彙的かつ機能的要素が出現する時にまとうさまざまな形を、明確でかつ完全な目録に作成してはいる。それは彼によれば五つ（殺人者とその犠牲者たち—禁止と侵犯—三番目の娘による解放—兄弟ないし近親者による女主人公の解放—殺

人者の罰と犠牲者の解放) がある。けれども彼は機能の仕方のモデルを提示しないし、連辞軸上での物語要素間の可能な相互作用を吟味しないし、範列のさまざまな変異体をいくつかの束にまとめようと試みることもない。もしそうするならば、ある種の連結は必然的であるか任意的であるかという点について、もしかしたら新たな光をあて得たのではないだろうか。それゆえ我々はモデルの構築に努めることにする。

「マリアの子」もしくは転用

梗概： 貧しい樵^{きこり}の幼い娘が聖母にひきとられ、天国で育てられる。ある日、出かけなければならなくなった聖母は、その子に 13 の部屋の鍵を渡し、最後の戸を除く全ての戸を開ける許可をあたえる。小娘はこの禁止に違反してしまう。12 の部屋はそれぞれキリストの弟子たちの部屋であり、13 番目のそれは三位一体の神秘をおさめていたのである。もどってきた聖母は子の過ちを見破り、これに問いただす。子は三度にわたって否認する。娘は天国から放り出され、人里はなれた孤独のうちに数年を過ごす。ある日のこと、王様が狩の最中に彼女を見つけ、彼女は口が利けなくなっているのではあるが、これと結婚する。三人の子供が生まれるが、子等はそれぞれの生まれた日に次々と聖母によって母親から奪い去られる。妃は民の信用を失ってしまい、ついには魔女として火刑を宣告される。まさに死のうとするときになって、彼女は過ちを告白する。三重の奇蹟——救済、子らの返還、言葉の取戻し——が起こる。

さきに述べたように、この物語は明らかに後世、聖母礼拝の出現および三位一体に関する論争の最盛期を見た 4 世紀よりはるかに遅れて、おそらく 12 世紀より後に作られたものである。他方、いくつかの細部は宗教的源泉への参照なしには理解することができない。聖ペテロによる三重の否認への明白な暗示である子の受ける三度にわたる尋問と否認にせよ、13 という数字の象徴性にせよ。

他方、結婚による最初の見せかけの決着の後に物語が新たな展開をみせる事実は、子孫への原罪の遺伝というキリスト教教義の枠内においてしか意味をもたないし、最後のシーケンスは偽りのない痛悔を条件とした赦しと救済への信仰を例証している。これは、他の民間伝承のテーマ——それは直接的に感知

される類似によって神話に結びつく——を援用した明らかに二次的な形成物である。裏切り者の奸策にかかった女主人公が分け入ることのできない森の中に逃れこみ、そこで何年ものあいだ苦勞して生きのびざるを得ないが、ついに王様が狩の最中にこれを見つけて認知する、お馴染みのシーケンスである。しかし、援用された要素はどのように変様されたがために、テーマの宗教的な読み直しは可能になったのかが分かるだろう。こうしていまや墮罪のモチーフは失寵のそれを薄れさせ、惨めな境遇にある主人公の姿は、透写図のように鮮明に、惨めで栄えあるエヴァの裸体を思い起こさせるのである。

それゆえこの昔話は、宗教的教義をたえず参照することによって構成されたのであり、教義の大衆化された変異体を提示しているのである。すでに示唆したように、結婚はけっして最終的な贖^{あがな}いの代わりになりえない暫定的な解決でしかなく（もちろんそこには強い悔いもなく、意志的な痛悔は無かったからだ）、事実お決まりのモデル（たとえばグリムの「忠臣ヨハネス」）に従って物語の新たな展開を準備する。この異文に独特の変異である試練のシーケンスの重複性には、聞き手をして純粋に社会的な意味での救いと霊的な救いとの間に区別をするよう促し、世間的な解決を選ぶことで誤謬に誘い込まれないよう警告する意味があると思われる。それをここでは、一つのステップに過ぎず結論ではありえない王との結婚が象徴しているのである。

「銀の鼻」もしくは逆転

「マリアの子」が単なる神話の転用をしめすのにたいして、「銀の鼻」⁵⁾は二段構えの派生を提示する。それというのもこの話の特徴は、意味論的な要素に与えられる価値を全体的に逆転させることにあるからである。

発端における同じ欠如の状況。銀の鼻をもった領主がやってきて、長女を侍女として城に連れてゆく。留守にする前に男は、ただひとつの小部屋を別にすれば城は自由に使ってよろしいと言い、彼女の知らない間にその髪に一本の花を差しこむ。娘は命令に背いて小さな戸をひらくが、それは地獄の入口であった。帰ってきた悪魔は、娘の髪にさした花がこげているのを一瞥して違反を発見し、劫罰を受けている人々のなかに彼女を投げこむ。次女についても同じ。三女のルチーアは身づくろいをしながら花を見つけ、これをグラスにさす。そ

のため、帰ってきた銀の鼻は花が依然として新鮮なのを見て、彼女が従順であったのだと思ひこむ。ルチーアは銀の鼻を利用して姉たちを救う。二人を洗濯物の袋に入れて母親のところに運んでもらうのである。最後に彼女の番が来たとき、自分は袋に入り、その代わりにベッドに人形を寝かせて悪魔をだます。

お分かりのように、先の話に対してこの話においては、若干の意味論的要素に否定的な標がついている。すなわち本質的に両義的な人物である禁止者たる恩人は、否定的な価値——それはこの異文のユーモラスな調子によって大いに弱められているとはいえ——をとりはじめ、敵対者として受肉しつつある。天国には地獄が対応する。禁じられた部屋はもはや三位一体（つまり愛と救済）のではなく、劫罰の神秘をおさめている。最後に、許しの可能性はもとより排除されているし、人間的な手段による救助の可能性も退けられているので（地獄の城と地上との間の頻繁な往復をするのは、ただひとりこの世とあの世との境界を越えることのできる悪魔である）、唯一の救いの可能性は女主人公の手のうちにある。それはしかし嘘をつくことによって実現される。真実の告白によってではない。置換えは行き当たりばったりではなく、否定的な相同性の法則に従ってなされていることが分かる。それは先の物語と同じ論理によって規定される一つのシステムを形成しているのである。

機能そのもの（とりわけ中心的な機能である禁止および侵犯）の意味作用に影響するこの価値の変化は、一見したところ、物語の意味を変えてもその構造を変えることはないように思われる。それは、プロップが民話の非・機能的と定義した要素のみに作用を及ぼすのではないだろうか。すなわち登場人物の身元ないし属性、場所、連結の要素のみにである。「マリアの子」における暫定的な救いの要素連続を例外として、二つの物語は同じ機能を同じ順序でなっている。言い換えれば統辞論的な構造は同一なのである。けれどもそこに絶対に厳密な相同性は無い。これら変異体のあいだには、調子の違いのほか、に、「銀の鼻」の中心的要素連続の三重化に由来する重大な隔りがある。そしてこの非対称の効果が構造上の差異の現れであるのか否かを知ることが問題になる。われわれの冒頭の発言をもっと精緻にし、解き明かすときである。

三重化と機能の分離

どの異文をとっても常に多かれ少なかれ目立つのであるが、中心の挿話のレベルに語りの反復、冗長性の効果が見られる。「マリアの子」の場合のようにただ一人の主人公がいるにせよ、「銀の鼻」の場合のように三人いるにせよ、重要なのは、侵犯とそれに続く懲罰には多数の侵犯と懲罰が先立っているという点である（時には後続している。けれども先行の場合のほうが支配的なモデルである）。例示の唯一の目的は中心のシーケンスに法則の力を与えることだからである。逆に、犠牲者がどれほどいるにせよ、懲罰の効果を無効にすることができるのはただひとり主人公のみである。それゆえこの三重化現象は、機能面では無視できると考えたくなるかもしれない。それには、語りのシーケンスの核を際立たせる純粋に文体的な価値をあてがえばよいのではないだろうか。

だが、三重化現象は誤解をあたえかねない。というのも反復の効果であるとしても、それは部分的にそうであるに過ぎないのである。一つにはそれによって新たな登場人物が導入され、物語に特有の展望が強調される事実があるし、もう一つには、それが「機能の分離」を引きこむ事実を見落としてはなるまい。実際、一方には犠牲者がいて中央の要素連続のあらゆる機能をになう。そして他方には対照的に女主人公がいて、打ち立てられた掟を踏みにじりこれを廃止する。不服従はあばかれないのだから懲罰がそれに続いておこることはない。ことに犠牲者たちを救助する機能は主人公だけにとっておかれている。こうして中心の挿話は次の式によってもっとよく表現できるだろう。

$$(A \uparrow I E T R P)^n + A \uparrow I E T S$$

そこにおいて冪指数 n は 1 から無限の間で変わりうる。

しかし、上の式で説明することのできない二つの変異体がある。一つは「マリアの子」である。そこでは、すでに見たように、主人公は一人で機能連続を担っているし、罰は子孫に及ぶとはいえ他に侵犯する人物は存在しない。中心的な要素連続は次の基本式であらわされる。

$$A \uparrow I E T R P S$$

しかしこの図式が有効なのは、罰があらゆる救済の可能性を排除するほど取り返しのつかないものではない場合のみである。このようなモデルの可能性は、疑う余地もなく、禁止を行う者である登場人物の身元や本性に、また禁止の有する価値に関連している。

もう一つの極端なケースは指数が零に縮小された場合であろう。たとえば、アンドリュースによって収集され、ドラリュによって目録に記載されたイタリアのリグリア州の民話（T311-2）は、「銀の鼻」の図式（恩人一敵としての悪魔）を採用するが、ただ一人の娘しか登場させない。そのために、部分的に欠けた次のようなタイプの変異体となっている。

A ↑ I E T S

論理的に侵犯行為につづくはずの弾圧の掟をしめすようなシーケンスは、まったく現れないのである。けれどもこのような欠落は実に途方もないことなので、物語は情報を提供する補助者を編みだしてこれを代補する（この場合は祖父の声であって、それが大鍋の中から響いて主人公に彼女を待ち受けている罰とそれを免れる手立てとを開示する）。現実的な教示（showing）のかわりに、潜在的に掟の存在を打ち立てる語り（telling）をおくのである。

これは貴重な異文である。なぜならば、それによって我々は、一方で語りの要素連続の三重化と他方で情報提供者による語りとのあいだに機能的な等価性を確立することができるからである。これは次の式によって書き直すことのできる極限の昔話なのである。つまり、

A ↑ I E T (R P) *

現実化されない形式であることを星印によって示しておく。この式は基本的なそれに連なる可能性もある。ただし（R P）の潜勢的な性格を十分に明記しなければならない。というのも敵対者の悪魔的な本性のために、これら全ての機能をただ一人の登場人物にまとめることはできないからである。それはまた同様に第二のタイプに結びつけることもできる。そこでnがゼロの値をとった場合である。最初の要素連続の消滅は後にR Pが現れることで埋め合わされるというわけである。

こうして筆者は語彙要素のなかにいくつかの相関関係を識別しかかっている。語彙要素は物語の全体的な機構（エコノミー）に対して影響しないわけではないことが明らかになりつつある。とりわけ機能の分離におよぶ影響である。つまり同じ要素連続を依然として形成しながら、いまや機能は異なる登場人物によって引き受けられているのである。語彙要素と統辞要素の相互作用は次の異文においてはもっと明白に見えてくるであろう。

「フィッチャーの鳥」と「青ひげ」一付加

「フィッチャーの鳥」は筆者の図式においては一種の蝶番ちょうばんがいのごとき物語であり、「銀の鼻」から「青ひげ」への移行をしめす形態である。それはいくらかの細部を除いて前者を再現し、また後者の最後のシーケンスを初めて導入する。「銀の鼻」との類似：ここでも娘たちは三人いる。姉たちを生き返らせ、金貨をつめた籠に入れて家に送り返すのは末娘である。

差異：敵はもはや悪魔ではなく魔法使い、すなわち半ば人間的で半ば悪魔的な存在である。城館はもはや彼岸ではなく、深い森の中に位置する。そして禁じられた部屋は殺戮の場となっている。娘たちは侍女の資格で連れてこられるが、末娘はその見せかけの従順さのおかげで妻の身分に昇格し、魔法使いは彼女に対して何もできなくなる。そして、ついに結婚式の日魔法使いとその友人たちは殺される。

機能の面で唯一の差異は、先行する形式からは排除されていた要素連続 V (Vengeance. 復讐) が出現することにある。この新たな機能の導入は明らかに敵対者が何者であるかという点に関係している。つまりこれは次第に人間的になり、こうしていわば弱さを身につけるのである。先立つ二つの変異体では、敵たる恩人と主人公との隔たりは最大化されている。天の宮殿も地獄の城も地上とは別の世界に属するように、保護者と被保護者とのあいだの隔たりは可能な限り大きい。後者は保護をうける孤児ないし侍女にすぎない。禁止のもつ神的で反駁できない性質のためであるにせよ、敵が本質的に攻撃の射程外存在であるからにせよ、復讐のモチーフは要するに考えられず、人は慎重な配慮によって身をまもる他はない。こうして戸の前に十字架を立てて銀の鼻の再来をさまたげるのである。

さて、この距離は次第に小さくなっていく。逆に女主人公と敵対者とのカップルの関係は強まり、そこから生ずる対立はますます劇的な形をとることになる。グリムの《Blaubart》（青ひげ）やペローの《La Barbe bleue》（青ひげ）において、主人公と恩人との間の社会的な隔たりが依然として重要であるとしても、後者はまぎれもなく人の世に属しているし、彼の城は世俗の力でも接近できる場所となっている。ペローにおいては、不可能事は論理に従い、ファンタジーは強力に現実世界に根づいており、あの魔法の鍵を別にすれば幻想的な要素は消え去ってしまっている。青ひげという人物はもはやぞっとするほどの醜さの特徴とするにすぎない。物語の暗示的な教訓は、宗教的次元の関心よりはむしろ政治的次元のそれを表現し、国家の誕生を宣言している。（それはここでは王につかえる士官であり、したがってある程度まで王の権威を代表する二人の兄弟の姿で現れている）。そしてまた大封建領主の権力の終焉を布告する。城をかまえた青ひげは臣下たる女たちに恣意的な裁判を行使する最後の暴君なのである。

一つの解釈を押しつけるつもりはないし、この異文に語り手があたえた独特の性格を無視するつもりもないが、「青ひげ」は、隔たりが減少し抗争は激化するという全体的な図式の中にその位置を占めることを確認しよう。復讐の要素連続と同時に、そしてそれにすこぶる強い論理的な分節によって結びついて、二人の新たな登場人物が出現することに気づく。まず「仲介者」である。その介入のおかげで、外からの助けを得ることが可能になる。援助は小鳥や子犬のような動物かもしれないが、ペローにおけるアンヌ姉さんの場合のようにまた人間であることも可能である。そしてもう一人は「復讐者」であるが、これは一般に親族の中の男性要素であらわされ、敵と戦ってこれを殺すことになる。

補助者、仲介者、復讐者

これまで検討してきた異文を比較することによって、主人公と敵対者のカップルに対しては副次的だが、物語の論理的な一貫性にとっては本質的な機能になる三通りの登場人物を引きだすことができる。彼らの存在もしくは不在は異文それぞれのもつ特徴の一つと考えられる。すでに指摘したように、第一タイプの民話にはこれら三者の一人として現れることはなかったし、その存在は

考えることすらできなかった。

それに対して、第二タイプの物語においては補助者は頻繁に現れる。というのも、それでもって敵と互角に闘うことのできるような生き生きした、まるで悪魔的な知性をもつのでない限り、女主人公が悪魔の鉤爪から自力で抜け出すことはおそらくできないからである。こうして数多くの変異体において、魔法の補助者の存在が必要になる。たとえば竈^{かまど}から出てくるお祖父さんの声や、どんな風にして鍵を洗えばよいとかどうやったら犠牲者たちの首は元通りにくつつくとかかを教えてくれるお婆さんである。ついでにここでもう一度、性格のあれこれの特徴が明白に定まるときには、それは物語の構造的要素と同一視されうることを確認しよう。というのもそれが不在ならば、ある種の機能の出現が決定されるし、反対にそれが現前しているならば、それらの機能は無くすむからである。

しかし、敵対者が悪魔である異文の場合には、この補助者——その魔術的な性格を強調しなければならない——の傍らに仲介者も復讐者も見出されない。

「青ひげ」タイプの版では、仲介者の存在によって補助者（その役割は主人公に彼女が受けかねない罰を免除させることにある）の不在は埋め合わされている。仲介者は兄たちに危険を知らせて主人公を助けに来るよう促すのである。こうして主要な登場人物の間に図表（１）で示す相関関係が得られる。

もっと単純化して次のように言うこともできる。第一タイプの物語にはいかなる補助者もない。第二タイプの物語においては、外的な援助が完全に排除される事実によって、その形はいかなるもの（心理的もしくは魔術的）である

	敵対者	女主人公	補助者	仲介者	復讐者
I	聖母 超自然的 肯定的	—	—	—	—
II	悪魔 超自然的 否定的	+(抜け目のない) —	— +(魔術的)	— —	— *
IV	領主 人間的 否定的	—	—	+	+

図表（１）

にせよ、補助者の存在が必要になる。それに対して第四タイプの物語においては、援助は外からしかやってこない。

この配置は上に検討した機能の分離という現象に緊密に結びついていると思われる。われわれは、第一タイプの物語においては、あらゆる機能が、同時に有罪者であり犠牲者であり救いの道具でもある女主人公によって全うされることを見た。第二のタイプにおいては、機能は二つのグループに分離し、救いの機能を確保することのできるのは主人公だけである。それに対して第四のタイプの場合には、彼女はヒロインの身分から潜在的な犠牲者のそれに移る。というのも、親族の介入がなければ彼女は犠牲者のリストを長めることになったであろうから。復讐の要素連続にこれを実現する親族の出現が加わる事実は、救済の機能が次第に外部へと送り出されるということを意味する。それをまず女主人公は一人で果たし、次いで魔法の助けを借りて果たし、ついには外部の人物がそれを代行するに至る。すなわち民話の全体的な進化に対応する機能の移動である。宗教的ドラマは魔法の諸力間の抗争に変形し、ついには純粋に人間的な抗争に成り果てるのである。

相関関係

昔話を、プロップの提案したシステムにしたがって機能の単なる文法的連鎖に還元すれば、それは次の三つの図式で表現することができる⁶⁾。

「マリアの子」・・・ $\alpha(a)A \uparrow IETRP \downarrow S(P)^n S$

「銀の鼻」
「フィッチャーの鳥」 $\left\{ \begin{array}{l} \alpha(a)A \uparrow (IETRP)^n + A \uparrow IET(S \downarrow)^n V^{**} \end{array} \right.$

「青ひげ」(グリム)
「青ひげ」(ペロー) $\left\{ \begin{array}{l} \alpha(a)(A \uparrow IETRP)^{n*} + A \uparrow IETR(P)^* S V \end{array} \right.$

(二重の星印はある種の機能の随意的な性格をしめす。それらは異文によって現実化されたりされなかったりする。星印一つは要素連続のうちに属しているために予言可能な機能をしめす)

けれども、物語のこの記号化は中心核の均一性を明らかにしめし、かつ物語

を単純な式に還元する確かな長所をもつとはいえ、失望もさせる。なぜならばそれは、共通の幹に接木される発展の理由を把握する助けにはならないからである。ある種の機能の不在もしくは現在、その任意のあるいは強制的な性格、その相異なる登場人物への分配（プロップの基本原理に反して、同じ機能を背負うのは必ずしも同じ登場人物ではないことを我々は見た）の理由を説明することが残されている。これらの変異体が共通にもつものを否定することはできまいし、それらがなぜ異なるのかを知らないですますこともできまい。それゆえに物語の統辞法そのものに影響する多様性を説明するために、そして変形のメカニズムをよりよく理解するために、語彙要素を再び導入せざるを得ないのである。

範列の対比

我々は語彙の変更にともなつて民話の構造のうちにひき起こされる変化を何度も強調した。けれども、弁別力をもつ事項と表現上の役割しかもたない事項とを識別する必要がある。敵対者がそのおかげで侵犯を発見するところの物品が鍵であるか卵であるかそれとも花であるかには、意味論的な変化は随伴しないし、統辞法上の変容も起こらない。それに対して、恩人の役割を演ずるのが聖母であるか悪魔であるかもしくは領主であるかに応じて、物語の機能の組織は根底から変更される。じっさいその場合には、ある種の機能の束の分裂とか新たな要素連続や人物の出現とかが確認されるのである。我々は一方の事項を表現的と呼び、他方は有意味の差異をあらわすがゆえに弁別的と呼ぶことにしよう。

これら後者を前者から識別することをゆるす唯一の基準は連辞の領域に属する。弁別特徴は、物語の構造のうちに変更を、そして終局的には意味の変化を引きこむことでそれと認められる。これは、音韻論の分析にならって音素に比較するのが適当であろう。それは、他の音素と入れ代わりうる限りにおいてのみ、そしてこの代入が意味の変更を引き起こす限りにおいてのみ抽出され、単位として画定されるのである。民話の基本単位もまた同様で、置き換えの可能性によって、また異なる意味がその置き換えに由来する事実によって特徴づけられる。

感じられないほどわずかず一つの音程から別の音程へと移ることができるように、そのように民話においても、範列の変容は無限に微妙なニュアンスを帯びるかと思われる。それゆえ、それらの変容はひとつの連続体を形成するのか、それとも段階的な進展であって、そのある段階で特定レベルを選択することによって根本的に異なる言表が得られるのか、を知ることが問題となる。言い換えればこの連続体はいくつかの離散した単位に分割されるのか。

家族関係	敵対者	場所	魔法物品	罰の範囲	救助者	補助者	仲介者	復讐	救済手段
一人娘 (第一タイプ)	聖母	天国	指	子孫	女主人公	-	-	-	告白
三人姉妹 (第二タイプ)	悪魔	地獄	花	先立つ犠牲者+二人の姉	末娘	知恵など	-	-	計略
同上 (第三タイプ)	魔法使い	森	卵	同上	同上	同上	-	殺害	同上
一人娘+ 二人兄弟 (第四タイプ)	金持ちの男	田舎の別荘	鍵	先立つ犠牲者+女主人公*	兄弟たち	*	姉、動物など	同上	武力

図表（2）

テキストの統辞論的な配置が変わらない限り、さまざまな語彙上の交代は無視できるのであって、それらの間に対立関係はないと断定することができる。それに対して、構造上のあらゆる変様は範列軸上のレベルの変化に対応するはずである。

けれども、(中間にくる多数の解釈を考慮にいれず) 問題の 4 編の異文に限った一覧表によっても⁷⁾、あらゆる変形が同時に機械的に起こるわけではないことは明らかである。あれこれの異文は「先立つ」民話のあれこれの「古風な」表現を保存していて、また別のあれこれの表現によって「続く」民話を先取りしている(これらの括弧つきの用語に年代順の意味はないことを忘れまい)。そのことは「銀の鼻」で確認したが、再び「フィッチャーの鳥」でもって検証することができる。この変異体の雑種的な性格は、魔法使いの曖昧な二重の本性——人間的でもあれば悪魔的でもある——に基因していると思われる。

重要なのは、可変的な要素は意味論的な束にまとめられるということであり、語彙は、語り手がそこから自分の靈感に任せてもしくは行き当たりばつたりに汲み取ることのできる茫漠たる塊をではなく、構造化されたレパートリーを形成しているという点である。敵対者は、聖母、悪魔、王、領主、魔法使い、白馬(カナダの異文)とさまざまに顔を変える。けれども、それらが、対立し組み合わせられる二つの範疇(超自然的/人間的—肯定的/否定的)に属するという事実との関連で、物語のとり方向は決定されるのである。つまり女主人公のになう機能は分離されるか否か、復讐者は現れるか、補助者は必要なのかなどが。

逆にまた、あれこれの機能の連鎖が与えられるならば、出発点となるあれこれの意味論的な配置も見出されることになる。こうして全体は、適合もしくは非適合の法則の存在によって構造化されているように見える。そしてまさにそれゆえに意味論的な束を析出することは可能なのである。

連辞間の連結

これまでの論述においてすでに筆者は、ある種の整合性の規則を確立しようと試みた。たとえば、もし敵が超自然的で否定的な存在であれば、解放は、普通には補助者の援助を受ける三番目の娘によってなされるのに対して、もしそ

れが人間的な存在であれば、女性は潜在的な犠牲者となり、解放および復讐の機能は親族へとうつり、その結果、ある仲介者の出現が必要になるというのであった。

それゆえある種の連結は基本的に排除される。たとえば敵対者が否定的な存在であれば、悔悛による救いはなく、それが超自然的な存在であれば、親族の介入はない。超自然的で肯定的であれば、復讐はない。他方、罰と救済の機能の分離は、敵が否定的な存在となるあらゆる民話に關与する必然的な特徴であるが、第一タイプの物語からは排除されている。（図表（3）参照）

以上に対して、任意のものとして現れる特徴ないし機能がある。「銀の鼻」タイプの話には、登場人物の形でであれ主人公の心理的な特質の形でであれ、必然的に補助者がいる。そして「青ひげ」タイプにもそのような登場人物の痕跡は見出されるのだが、そこでは当の人物は、補助者に割り当てられる機能の一部分しか果たさず、その役目は情報提供者のそれへと縮減されていることが分かる。つまりこの人物は任意の存在という性格を帯びているのである。

親族の介入についても同様である。第一タイプからは排除され第三タイプでは義務的なこの機能は、第二タイプでは任意の冗長的な特徴として姿をあらわすこともある。それは、三人姉妹の帰宅はすでに満足すべき結末とみなされうるにもかかわらず、これを念入りに仕上げ、物語のその後の展開の可能性を完全に取り除く役を果たすためである。

	肯定的	否定的	肯定的	否定的
超自然的	悔悛		一人娘 = 犠牲者 – 女主人公	二人の犠牲者 女主人公
人間的		親族の介入 復讐		犠牲者たち + 女主人公* 兄弟たち

図表（3）

モデルの予言的な価値

このようなモデルの有効性を検証することが残されている。検証はこの解読用グリッドを、記録されているあらゆる昔話に当てるという条件でしか実現できない。それは膨大な作業であって、コンピュータの援助が不可欠と思われる。この手段を用いることのできない筆者としては、地理的に限定されるけれども大量ではある資料体でもってこれをテストするより他はない。大量というのも、それはドラリュおよび M. L. テネーズによってフランス語圏諸国で収集された 49 編におよぶヴァージョン（Ⅱ）だからである。

ドラリュによる分類は、明確な基準にもとづく物語の分析によるよりは、むしろ主観的な全体的印象に依拠しているように思われる。彼はサン=ティーヴ⁸⁾が方法を欠くといつて厳しく非難しているのだが、T312 A のタイプにヴァンデ地方の一民話（T312 A・7）を含めるとき、彼もまた軽率の謗りを免れないであろう。その話の主人公が「青ひげ」とともにもつ共通点は、数人の女性の殺害と鬚——もっともその色は違っている——だけである。カナダの民話「青ひげもしくは大きな尻尾をもった獣」を、中心のシークエンスにおける三重化を唯一の理由として二つのタイプに分類するときも同様である。われわれは姉妹の数を分類の基準として採ることはできないこと、三重化という文体上の現象はある種の機能群の構造的分離を隠蔽しがちであることを見た。ドラリュは以上のことを見逃したかと思われる。これ以上論争するつもりはない。筆者の意図は分類を立てることよりは、分析のもつ操作上の効力を検証することにあるのだから。

ドラリュの目録では、第二タイプについて三つのヴァージョンしか与えていない。すなわち一つはカナダのそれで、二つはまさしく「銀の鼻」の話が由来する北イタリアに近い地帯で収集されたものである。これだけでは、もし数多くの中間的なテキストがないとしたら、モデルの予言的な価値を検証するには不十分であろう。「青ひげ」については、ドラリュの採取したテキストは図式の妥当性を裏付けてくれる。ただしアンティル諸島に由来する四つの変異体は例外である。そこでは敵は悪魔であるが、最後に女主人公の兄たちによって殺害される。我々の提案しているモデルからすれば異常な形であるが、それはそれらが出現した植民地社会の特殊な性格によって説明されないかどうかを知る必

要があろう。これらを除く諸版の均一性もしか、ペローの昔話の途方もない普及、それが地域の版に及ぼした影響によって説明されるかもしれない。

それでも、構成されたモデルは何より統計的価値をもつことを確認しよう。とどめおくのは 31 編のヴァージョンである（以下は除外する。すなわちアンティル諸島の 4 編：T312-35；T312-36；T312-37；T312-38，ヴァンデ地方の「緑ひげ」T312-7，ブルターニュ地方の 2 編の「コモール」の異文 T312-3，T312-21——これを我々は「フィッチャーの鳥」のタイプに分類する）が⁹⁾、そのうちには、敵が人食い鬼となったものが 2 編、巨人となったものが 1 編、中心的な禁止のモチーフが消失して、これに主人公の漠然とした過失の感覚が取って代わったものが 3 編、そして敵対者の懲罰が起こらないものが 2 編ある。このような変異は、混交、混同、失念などを考慮に入れるならば、それほど大したことではない。

最後に、区別を明確に示す解決のおかげで、この図式には分極の力は導入されるとはいえ、それによって中間形態の増殖が妨げられるものではないことを確認しよう。範列軸上に一定数の対立を析出することはできるものの、それらは相互に排除しあうわけではなく（二つの音素の間に中間的な解釈を容認しない音韻論のモデルとの違いである）、交差や重なる存在を容認している。それゆえ問うことができる。民話には自然科学における計数（デジタル）型の分類法を応用して、それを多重定立的（ポリテティック）な対象とみなし、そしてこれらの対象を、その大部分の特徴をもつところの範疇——たとえ別のあれこれの基本的な特徴の不在が確認されとしても——に入れるのが、適当ではないだろうか。昔話においては発端の所与が一定の可能性の幅を開きうること、したがって重なり合いも起こりかねないことを認めなければならないと思われる。

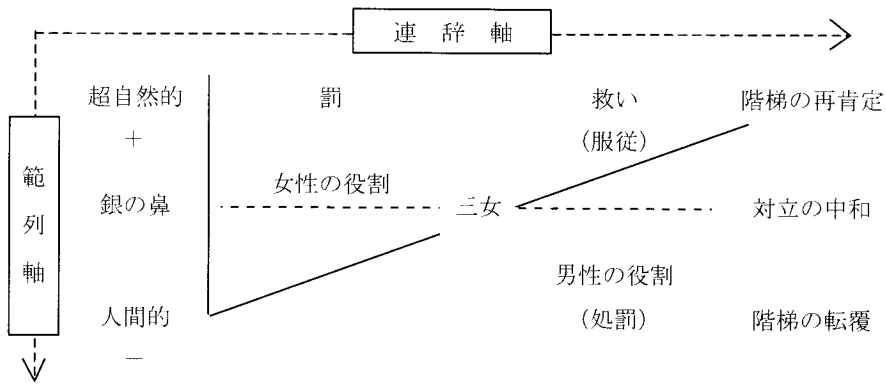
じっさいドラリュの目録には、「フィッチャーの鳥」タイプ——我々はすでにその中間的な性格を強調した——の 5 個の変異体が認められる。つまり T311-3，T311-4，T311-5，T312-3，T312-21 である。これらのうち 2 編はカナダ、2 編はブルターニュ、1 編はバスク地方から出ているのは偶然であろうか。いずれもまさにフランスの影響が弱まって届いたであろう、混交が起こりえたであろう諸地帯なのである。もっともこれら中間的形態が相対的に多いことは、

図式の中でそれらが中心的な位置を占める事実によって説明されるとも考えられる。

レヴィ=ストロースは、宣言の価値を帯びるにいたった論説の中でこう述べている。

神話の特徴づける共時・通時構造によって、神話の諸要素は通時的なシーケンスに秩序づけられるが、それらは共時的に読まなければならない。あらゆる神話はそれゆえ、反復の手法のうちにそして反復の手法によって、いわば表面に透けて見える薄層構造を有している。(Ⅶ、Ⅰ、p. 254)

同様に個々の民話は、それが部分を成しているところの系列全体に重ね合わせられるという条件で、独自の意味を帯びてくる。こうして禁じられた部屋のテーマの4通りのヴァリエーションを重ねあわせ、基底の形と考えられる原神話と比較することによって、システムのダイナミックな性格が明らかになり、民話それぞれが発端における対立——禁止およびその侵犯に結びついた懲罰によって象徴される——を解消するために、どのようにして新しい解答を提示するかが示されるのである。すなわち、物語の通時的な面では、個々の民話は冒頭に緊張を設定した後でこれを解消しようと努める。あるいは二極の一方を除去することによって。すなわち主人公の服従もしくは敵の殺害である。これは全体主義的な解決である。あるいはそれらの対立し合う二極を相殺することによって。「銀の鼻」において三女は犠牲者の役も裁き手のそれも演ずることはなく、抗争を中和する機能をもつ。それは物語のレベルでは完全なシンメトリーとして表現される。三重の救助の要素連続は断罪のそれと均衡をとることになるからである。「フィッチャーの鳥」はさらに一步をふみ出して、親族による敵対者の罰のシーケンスを導入する。同時に共時的な面、つまり範列軸上の変異に関して分かるのは、一方では主人公と敵対者との間の隔たりが徐々に縮小されていくことであり、他方では埋め合わせの形が徐々に設置されていくことである。システムは図表(4)で表すことができる。



図表（４）

結 論

昔話を語るのが一つの芸術であるとすれば、もっと他の相関関係も認められる。たとえば「銀の鼻」におけるバラ、カーネーション、ジャスミンの選択は、もはや解説できなくなった意図でとはいえ、敵対者の属性に結びついている。同じように主人公の名前は敵の何たるか（つまり **Lucifer**）ということと無関係ではない。これは知らないうちに彼女を背負って運ぶことによって身を挺して洒落を実現する¹⁰⁾。けれどもこの鏡の戯れは物語の展開には影響しない。それゆえ我々はこのような遊びの（ないし詩的な）——とはいえ昔話の喜びによって本質的な——機能を無視して、（バルトのいわゆる「枢軸の機能」）に還元される物語の組織において役割を演じ、かつさまざまの変異体を重ね合わせることによって立ち現れるような機能だけを考慮にいった。

しかし、民話において分布の（もしくは連辞の）相関関係が優勢であるからといって、意味論的な要素の方を偶発的な滓のごときものと見なしてはならない。もちろん全てが意味をもつというわけではない。明らかに頓挫した、畸形の、異常な形も存在する。「雑音」に属するもの、伝播の諸条件に帰せられる意味の喪失も無視することはできない。それゆえにこそ一層、昔話の中で何が意味するのかを知ることが重要になるのである。

バルトによる機能の最大の定義「物語の中で相関関係の項として現れるあら

ゆる要素」(V, p.7)とプロップによる最小の定義「筋の展開の中でそれがもつ意味の観点から規定される登場人物の行為」(VIII, p.31)との間に、統辞構造のうちに意味論的な要素を復帰させるような中間的定義を提案することができるはずである。プロップの定義は、それを提案することはなかったものの、この種の復権の可能性を準備してもいた。

多くの研究(レヴィ=ストロースやグレマスなど)がなされて、内容は無定形ではなく構造化されていること、それに連辞秩序はある意味で範列関係の投影であることを示している。また別の方向でトドロフは二種類の述語(プレディカ)を区別することによって機能の概念を拡大することを試みている。すなわちある状態から別の状態への移行を記述する動的な述語と安定もしくは不安定の状態を記述する静的なあるいは反復的な述語である(X, pp.49-50)。これら二種類の述語——名詞述語と動詞述語——との存在を考慮に入れて、それらの間の相互的な干渉の可能性を吟味することが必要であろう。

全ては統辞なのか。全ては語彙なのか。ここにもまた中間的な解釈がないかどうか問うことができる。これら二つの局面の間に、恒常的だが硬直することはなく、可変的だが無秩序ではないいくつかの関係を見分けることができないであろうか。結局この研究は、相関関係および説話モデルを確率論的に見る見方へと向かうべきことをわれわれに教える。昔話の語り手は、伝達すべき経験の性質に応じてある特定の意味論的な領域に賭け、相関的に、可能性の幅の内部で或る特定の統辞論的連鎖を選ぶべく促されるのである。そして連鎖そのものは最初の選択によって規定されることになる。反対に、一つの形を選択するならば、内容の選択は一定数の意味論的潜在性の中でしか可能ではなくなる。こうして民話は、純粋な偶然と絶対的な必然性の二極の中間で、文化の論理が言明するところの適合もしくは排除の決定を基にして、自由の戯れの狭い幅を余すところなく開発するのである。

主要参考文献

I — Italo Calvino, *Fiabe italiane*, raccolte dalla tradizione popolare durante gli ultimi cento anni et trascritte in lingua dai vari dialetti da Italo

Calvino, Mondadori, VI ristampa 1977.

『イタリアの民話』（最近 100 年の間に民間伝承より収集され、様々の方言からイタロ・カルヴィーノによってイタリア語に書き直された）、モンダドーリ社、第 6 版、1977 年¹¹⁾。

II— Paul Delarue, *Le conte populaire français*, Maisonneuve et Larose, 1976.

ポール・ドラリュ『フランスの民話』、メゾンヌーヴ／ラローズ社、1976 年。

III— Jacob et Wilhelm Grimm, *Les contes (Kinder-und Hausmärchen)*, Flammarion, 1986.

ヤコブ／ウイヘルム・グリム『子どもと家庭のメルヒェン』、フラマリオン社、1986 年。

IV— Charles Perrault, *Histoires ou Contes du temps passé*, Fac-similé de l'édition originale, Genève : Slatkine Reprints, 1980.

シャルル・ペロー『物語あるいは昔話』、初版複写版、ジュネーヴ、スラトキン・リブプリント社、1980 年。

V— R. Barthes, « Introduction à l'analyse structurale des récits », Communications, 1966.

R. バルト「物語の構造分析入門」、『コミュニケーション』誌、1966 年。

VI— A. J. Greimas, *Du Sens*, Seuil, 1970.

A. J. グレマス『意味について』、スユ社、1970 年。

VII— Claude Lévi-Strauss, *Anthropologie structurale*, I et II, Plon, 1974.

クロード・レヴィ＝ストロース『構造人類学』、上下巻、プロン社、1974 年。

VIII— Vladimir Propp, *Morphologie du conte*, suivi de « Les transformations des contes merveilleux », Seuil, 1970.

ウラジーミル・プロップ『民話の形態学』あわせて「魔法民話の変貌」を収録、スユ社、1970 年。

IX— J. Servier, « Signification du mythe dans les civilisations traditionnelles », in *Problèmes du mythe et de son interprétation*, Paris : Les Belles-Lettres, 1978.

J. セルヴィエ「伝統文明における神話の意味」『神話とその解釈の諸問題』

(パリ、ベル・レットル社、1978 年) 所収。

X— Tzvetan Todorov, *Poétique de la prose, suivi de Nouvelles recherches sur le récit*, Seuil, 1978.

ツヴェタン・トドロフ『散文の詩学』および『物語に関する新たな研究』、スイス社、1978 年。

訳 注

- 1) 翻訳においては、長大な段落には適宜改行を行ったほか、若干の長い引用文を独立引用文に変更したことをお断りする。
- 2) 丸カッコ内のローマ数字については、主要参考文献参照。
- 3) 鈎括弧の語句は原文では斜字体 : *prédicats, sujets, compléments*. 以下同様の処理を行う。
- 4) 『千一夜物語』(一)、「第三の托鉢僧の話」(佐藤正彰訳)、岩波文庫、1988 年、195-225 頁 ; *Les Mille et une Nuits*, nouvelle éd. par R. Khawam, Phébus, 1986, t. I, « Histoire du troisième derviche Qalandar » (pp. 323-367).
- 5) 主要参考文献 No 1 参照。
- 6) 以下の符号については「タイプの形態論」の節参照。
- 7) 図表 (2) 参照。
- 8) Cf. Pierre Saintyves, *Les contes de Perrault et les récits parallèles (1923)*, in *Les Contes de Perrault, En marge de la légende dorée, Les reliques et les images légendaires*, Coll. « Bouquins », R. Laffont, 1987, pp. 15-494.
- 9) 残念ながら、49 編の中からいかなる異文を排除して 31 編にいたるのか (かっこ内の指示では 7 編しか消去されない)、訳者には明確にできない。
- 10) ラテン語の名詞 (および形容詞) «Lucifer» (イタリア語では «Lucifero» は文字通り光 (lux) を運ぶ (ferre) (者) を意味するが、固有名詞としての Lucifer は、1) 光をもたらす明けの明星を指し、次いで 2) 悪魔の名前の一つとなっている。「銀の鼻」の女主人公の名は Lucia (いわば光子) で、これを彼はその名のとおり運ぶのである。

- 11) この2巻本の上巻——他の34編とともに「銀の鼻」をおさめる——には、カルヴィーノによる民話への「案内」(pp. 5-67)および「文献目録」(pp. 73-78)が付されている。なお同書の「銀の鼻」をふくむ10編の話は、日本語にも訳されている(『イタリアのむかし話』(大久保昭雄訳)、偕成社、1989年参照)。